ブラッドベリー編　序章　あたし、どうなるんだ？
あたし、ブラッドベリーってんだ。今テラツーは小樽がありったけの愛で育て上げたあたし達の乙女回路でローレライは復活し、
新しい時代が始まろうとしている。そしてあたし達 3 人は永遠の恋人になるはずだったメソポタミア号が小樽の元に帰してくれて、
あたし達はまたいつもの生活に戻った。
そしてその数ヶ月経ったある日あたしはドクター・ローレライに呼び出された。でも最近チェリーがローレライに改造され、
おねしょをする様になった事がきっかけで離れ離れになって生活するようになったもんだから、なんだか嫌な予感がするんだ…
「ローレライ久しぶりだな。」
「あら、ブラッドベリー。よく来てくれたわね」
「あんたが呼び出したんだろ」
「ふふっ。そうね。じゃ早速だけどあなたを少し改造したいの」
「改造？どんな風にだ。まさかチェリーみたいに…」
「それはされてからのお楽しみよ♪」（キラッ）
「うぁッ!」
あたしは目の前が真っ白になった…それからは目覚めるまでわからなかった。
そして…
「目が覚めた？ブラッドベリー？」
「あんた一体あたしに何を…」
「『母性』の乙女回路を持つあなた達にはしばらくの間、あたしの研究に付き合って欲しいの？」
「あなた達？誰の事だ？」
「ティーゲルよ」
ティーゲルって最近ローレライに修理して貰ったばかりの…まぁパンターよりはマシか…
「そうか…で、あたしはどんな事をすればいいんだ？」
「そうね、ブラッドベリーの場合は女優になったり、牛になりきって牛さんと一つに繋がったりとか」
「な、なんだそれ!お断りだ!!!女優ならともかく牛ってどういうことだよ!!!うぁぁぁ!!!」
「逆らう度にこの『服従電波』をかける事になるわ…とにかくあたしに付き合ってね…わかった？」（すっ）
ローレライはあたしに小さい玉を見せつけた。おそらくそれはあたしを痺れさせるもの…あたしはそれを奪おうとしたけど…
「あ、言い忘れていたけど服従電波のレベルを最大にすれば記憶が全て飛んでしまうわ。つまり小樽達と過ごした思い出がなくなって

しまうって事。それとこの玉を奪い取ったら、あなたは最大レベルの電波をくらう事になるから、決して変なマネはしないでね♪」
そ、そんな…あたし、ローレライの操り人形になるのか？折角また小樽と一緒に暮らせる様になったのに…こんなヤツに従わなきゃ
いけないのか…
そしてあたしは小樽の家に帰る事になり小樽になんとかしてくれと頼んでも…
「すまねぇブラッドベリー…ローレライの研究のためとなったら…俺は…それにローレライはテラツーでたった一人の女性だ。刃向かえば
俺も何されっかわかんねぇんだ」
「なんだって!!!小樽あんた…なんて薄情な…いや、わかったよ。やってみなきゃいいことか酷い事かもわかんないもんな。チェリーも
意外と気に入ってるって言ってるし…」
「すまねぇな…で、俺の家にずっといるんだよな？」
「確かにいるけど、あたしはロマーナやニューテキサスとかいう国に行くことになってさ…しばらく家をあける事もあるんだ…」
「そんな遠いところへ、そうか…だけどローレライがいれば大丈夫だよな」
「そんな〜ブラッドベリーまでいなくなるの？ボクそんなのやだよ!」
ライムが駄々をこねるとあたしは
「ライム。あたし沢山お土産買ってやるからさ…そんな顔しないでくれよ」
「う、うんわかった。ローレライはボク達の分身だから仕方ないよね。言うこと聞かなきゃいけないよね」
あたしはローレライに何をされるかわからないまま眠れない夜を過ごした。ちなみにあたしはチェリーの様に食べ物や飲み物がおしっこや
愛液に変換する機能が搭載されていてあたしは寝るまでの間 2 回厠（トイレ）にいったんだ。でもチェリーみたいにおねしょはしない様に
なっているらしい…一体何がしたいんだろうなローレライは…

ブラッドベリー編　第一章　あたし、ヤられ役？
あたしがローレライに改造されてから 3 日経ったある日、あたしはついにローレライに呼び出された。あたしとローレライは梅幸が運転する
車に乗り目的地にたどり着いた。そこは
「ローレライ。ここってテレビ局だよな」
「惜しいわね。ここはプロモーションビデオ等を撮影するスタジオよ」
「え、もしかしてあたしが主役ってヤツか？」
「まぁそういうことね、あ、共演者も来たわ。挨拶しないと」
ローレライにそう言われるとあたしはまず少し痩せてる男に挨拶した。
「おぉ　ジャポネスを救った英雄が主役だなんてびっくりだな　確かブラッドベリーさんだったっけか　俺は越後（えちご）っていいます。
よろしく」
「そうか何か照れるな。まぁ今日はよろしく頼むぜ」
そして次は少し小柄でメガネをかけた男に
「ボクは甲斐（かい）と言います。よろしくお願い致します」
「おいおいかしこまんなよ。もうちょっと砕けろよ。」
「はい。わかりました」
そして今いる出演者の中では少し体格のいい男に
「オイラは相模（さがみ）っていうんだ　よろしくな」
「あぁよろしく」
一通り挨拶が終わったけどあたしは少し気になる事があった。それは
「お、おい出演者ってこれだけか？」
「え、ブラッドベリーさん何も知らないんですか？ここ、アダルトビデオの撮影現場として使うんですよ。」
甲斐がそういうと、あたしはなんだか訳がわからなくなってきて
「な、なんだって。おい、ローレライどういうことだ？」
「ブラッドベリーさんダメっすよ～監督さんに乱暴な言葉使っちゃ～」
「監督？何言ってんだ相模。あたしはローレライとは…うぁっ!!!」
まさか今のは服従電波？くそッまたローレライが
「やられたね。まぁとにかくブラッドベリーさんは監督さんの言うことに従わないとダメなんですよ。」
「わかったよ…」
そしてあたしはローレライ、いやローレライ監督に指示されて撮影用の衣装に着替えた。スカートの丈が長いセーラー服だ。そして
相模達は黒い制服つまり学ランを着ていた。そして相模はあたしを冷やかすように…
「おぉ　ブラッドベリーさんスケバンじゃないですか～　イケてますよ♪」

「おいおい…こんな長いスカート動きにくいぜ」
「本当に何も知らないんですね。あ、台本が来ましたよ」
甲斐が台本を配り、あたしはおそるおそる台本の内容を読み始めた。そこにはとんでもない内容が書かれていた。
「な、なんだってスケバンのあたしがレイプされるだと…っていうかレイプってもしかして」
「そう。ボク達三人がブラッドベリーさんに襲い掛かるっていう展開ですよ」
「そ、そんな!!!あたしが絶対嫌だからな。何がレイプだ!!!ちくしょ…うぁぁ!!!」
また服従電波か…多分大声がスタジオに響いたからローレライはそれに気づいて服従電波を放ったんだろうな。もう従うしかないんだな…
あたし達はまずこの作品の台詞と段取りを覚える。どうやらあたしの制服がビリビリに破けてロやらアソコで犯される展開の様だ。
マリオネットとはいえあたしは乙女回路を付けてるんだ…だから…怖いなそれに服従電波もあるし…
そしてローレライ監督のもと撮影が始まった。あたしは台本通りに読むけど
「おぅおぅ　よってたかってあたいに迫ってくるたァいい度胸だな!」
「カーット!!ダメよブラッドベリー棒読みしたら。ちゃんと感情を込めないと…」
「は、はいわかりました。」
あたしは今のローレライは監督なので慣れない敬語を使う。なんだか自分が自分で無くなる様な気がするな…
そんな状況の中撮影は順調に進み、あたしの制服はビリビリに破けて行き左胸とアソコが露出するまでに至った。更にあたしは手足を
縛られて身動きも取れない。最もその気になればあたしのパワーでこんなロープは外せるけどローレライ監督が服従電波を撮影中でも
放つのでそれも出来ない。
そしてそろそろ越後達が自分の「もの」を挿入するシーンに入る。怖いな…でもあたしはマリオネットだから挿入されたとしても子供は
出来ないし病気にもならないからそういう意味ではマリオネットでよかったと思う。そして…
「よ～し　そろそろトドメと行こうか　どうだ？2 人共」
裏番長役の相模が言うと舎弟役の甲斐と越後が
「な～に言ってんすか？ここは番長が一発決めないとダメっすよ」
「そうそう。格好いいとこ見せてくださいよ」
「へっ何遠慮してんだよ!3 人で力を合わせてかかるのが俺達のやり方じゃねぇかよ!!!」
なんだ…こんなの台本には書いてなかった様な…あたしは助監督が出したカンペに書かれている「味が出ているアドリブを」というのを

見た。
それに合わせてあたしも潔くやろうと思ったけど…
「えぇい畜生!!!やるなら早くやりやがれ!!!うぁぁぁぁ!!!」
服従電波をくらっている中監督が
「カット!ブラッドベリー今のは確かにアドリブだけど「やっつけ」にしか聞こえなかったわ。撮り直しよ!」
「す、すいません」
あ〜あ。あたしってば相模達のいいムードに水を指しちまった…だけどこいつらよく見てみると本番前の時ってなんか暗い顔をしているな。
本当はこういう事苦手なのかなと思いながらついに…
「あああ!!!ムグゥ!!!」
あたしは相模達の「もの」が口と尻の穴とそしてあたしのアソコに入った。
「ば、番長!!!こいつのケツ最高ですよ!」（ドピュッ）
先にイッたのは尻の穴つまり「アナル」を担当している甲斐だった。そして次は
「く、クッソー俺ももう…」（ドピュッ）
次にイッたのはあたしの口を担当している越後だった。苦い精液ってやつががあたしの喉の奥に入っていく。
「へへッ　番長のメンツ今回も保てたな…そろそろオレも…」（ドピュッ）
最後はあたしのアソコを担当している裏番長役の相模だった。でも驚いたなマリオネットのあたしでイケるなんて、もしかして
ローレライはあたしを相模達が感じやすい様に改造してくれたのかな？
そして 3 人のフィニッシュが終わった時台本通りに段取りが進んでいった。そして…撮影は終了した。
あたしは憂鬱な気分で休憩をとっていたら相模達がやってきて…
「ブラッドベリーさん。今日はありがとうございました　凄くよかったですよ」
相模は凄くペコペコ頭を下げているがあたしは
「どうしたんだ。何か謝っている様に見えるけど…」
「実はボク達は…」
「どうした甲斐。言いたい事は言った方がいいと思うぜ」
「ボクたちは好きでこういうことをやっている訳じゃないんです!」
「どういう事だ？」
「オイラ達…色々と事情があってな…だから 3 人共仕方なくこんな事をしてたんだ」
「オイオイ、事情ってなんだ…それで暗い顔してたんだなあんたたち」
3 人の話によると越後は事業が破産して借金を返すため仕方なくこういう仕事をしていて、甲斐は借金の保証人になってしまい、とにかく
高額の収入を探した結果こういう仕事が偶然見つかったらしい。そして相模は一家の大黒

柱とも言える父親が病気をしてしまい手術代を
稼ぐためと４人の弟を養っていくためどんなにタチの悪い仕事でもしていく他なかった。
「あんたたち苦労してんだな…それなのにあたしは駄々をこねてばかりだったな」
「そ、そんな俺達もテラツーを救った英雄にこんなことをさせるなんて…あんたのマスターになんてお詫びしたら…」
「よせよ…もういいんだ、あんた達の苦労も分かったしあたしはこれっぽっちの事で悩んでたってだけの事さ」
「あ、ありがとうございます」（ぐすっ）
甲斐は泣いた…そしてそれにつられて越後も…相模は泣いてる様に見えないけど本当はきっと辛いんだろうな。
そして撮影は終了したので撤収することとなった。どうやら出演者は早めに切り上げる事になっている。そして越後達３人と別れを告げ、
あたしとローレライは梅幸が運転する車に乗った。そして今日の事をローレライに話す事にした。
「なぁローレライ。アダルトビデオってみんな辛い人生の真っただ中に入った奴ばかりだからこういう事は仕方なくやっているのかな？」
「う～ん。実は…テラツーでアダルトビデオを撮影するのはブラッドベリーのが初めてだから…詳しくはわからないわ…」
「そうなんだ…」
あたしは今回の撮影で出演者の苦労が分かった様な気がするのである意味ではいい経験になった。次の展開もこうだといいな…

ブラッドベリー編　第二章　あたし、おっきな学園生？

あたしはあの撮影がきっかけでローレライの研究が怖くなり始めた。そして今回はローレライとロマーナに出張することになった。
あたしはそのことを小樽達に話したら小樽は、
「なぁブラッドベリー。どれくれぇいなくなるんでぇ？」
「わかんないけどロマーナって国だからおそらく２・３日位いなくなるな」
「え～そうなの？寂しいなぁ」
ライムがそう言うと今は近くの長屋に引越ししているけど毎日夕飯を作りに来るチェリーが
「ライム。これもローレライの研究だから我慢しなきゃダメよ」
「そうそう。そのかわりブラッドベリーのご飯はこの花形美剣が食べてあげるから…」（ドガァァァ）
「あいや～!!!!!!」
あたしは花公のバカな発言に鉄拳をくらわせた。でもあたしがいないと花公何すんのかな？それも心配だ。出張ってこんなものなのかな？
そしてその夕方あたしはローレライと一緒に梅幸が操縦するクルーザーに乗ってロマーナに向かった。でもロマーナってだけあって到着
するのに半日もかかってしまった。気が付けばもう朝だ。
ローレライはあたしを目的地へと連れていった。そこは、ロマーナ第 4 学園と書かれていた。ま、まさかあたし学園生になりきるのか…
ローレライはあたしの予想通り「ぶらっどべりー」と名札のついた学園生用の制服を渡し人目のつかない場所で着替えた。この服、
あたしの体型に合わせているようだな。それにしても下着まで少女用ってのはどうかなと思い、ローレライについていくことになった。
それにいつも結んでいる髪は下ろされてリボンを左右に不自然な感じで付けられた。
着替えが終わった後あたし達は園長のシクルイさんに挨拶を済ませた。
「テラツーで今唯一の女性であるローレライ殿が先生をやってくださるとはロマーナも少しは盛り上がる事でしょうな。ところでそちらの
マリオネットは…」
「あぁ、彼女はブラッドベリーと言って　感情を持ったマリオネットなんです。」
「おぉ　このテラツーを救った英雄ですか。これはこれは、ですが何故にこの様な格好をしてるのでしょうか？」
「それは彼女も学園生達と遊びたいと言うことで」
「なるほど、先生では無く学園生としてということか…まぁいいでしょう。ですがブラッドベリーさんも知っていると思いますがテラツーは

男ばかりの星、なので学園生は基本的に男の子しかいませんがよろしいでしょうか？」
「そ、それは」
「申し訳ありません、シクルイ氏。ブラッドベリーは緊張しているようで、代わりにあたしが喋る事にしますね」
「は、はぁ…」
そして…ローレライは一日先生としてあたしは一日学園生として、シクルイ園長が指定した教室に入る事となった。
そして園長が少年達に挨拶をしてからあたしとローレライを紹介する流れになった。だけど少年達の視線は明らかにあたしに行っているな…
「え～皆さん。この方はジャポネスから来てくれましたローレライ先生です」
「はじめまして、先生と言っても色々わからない事もあるけど、皆さんと楽しくやっていける様に頑張ります」
ローレライの自己紹介に学園生達から拍手が入る。
「そしてこの子はマリオネットですが君たちと同じ人間の心を持っているブラッドベリーちゃんです」
「お、おぅあたしブラッドベリーってんだ。よろしく…うぁぁぁ!!!」
また服従電波か…あたし間違った事言ったのかよ？と考えている間にローレライはあたしを廊下に連れ出した。
「ダメじゃないブラッドベリー!あんな自己紹介しちゃ。ちゃんと周囲に合わせなさい!例えばライムの様に…」
「あぁ…いや、うんわかったよ…ごめんなさい」
そしてあたしとローレライはまた教室に戻る。
「ホラ、ブラッドベリー挨拶なさい!」
「は、はい。あたしブラッドベリーって言うの。みんなとお友達になれるように頑張るね…」
あぁ、凄く恥ずかしい…だけど、アダルトビデオの撮影の経験で少しはこういった恥ずかしさにも慣れてきた様な気がするな。
と考えている間に一人の学園生が質問した。
「ねぇねぇ　ブラッドベリーちゃんてなんでローレライ先生よりおっぱいおっきいの？」
やっぱりそこに食いつくか。困ったなぁ…そこにローレライが
「それはね…ブラッドベリーはいつも牛乳を沢山飲んでるからなのよ♪」
オイオイ、マリオネットが胸なんて育つかよ…でもさすがに少年だけあって…
「あ～そうなんだ～牛乳沢山飲めばボク達もおっきくなれるもんね♪」
ナイスフォローだな…後でローレライにありがとうと言っておこう。そしてついに学園生との触れ合いが始まった。ローレライ…いや
ローレライ先生はオルガンを弾いてあたしたちはお遊戯をする。意外と楽しいもんだな…

小樽達にはとても見せられないけど…
そんな中あたしはトイレに行きたくなった。それをローレライ先生に伝えるも
「もうちょっと我慢出来ないかな？」
「う、うんあたし我慢するね。」
とりあえず我慢をしようとするあたしだけど、アレンという学園生が…
「ねぇねぇ　ブラッドベリーちゃん　おしっこ我慢するの良くないよ」
「でもぉ漏らしたら汚いでしょ…みんなに嫌われちゃうよ…」
「そんな事ないよ…ホラ!あれ!」
どうやらジミーって子がおしっこを我慢できなかった様だ…ジミーは少しぐずり出した。
そんな時ローレライ先生が…
「あ〜ダメよ〜泣いちゃ。男の子でしょ」
「うえええ〜ん!!!」
「う〜ん。困ったわねぇ…あ、そうだ!ねぇブラッドベリーもおもらししたら？そうすればきっとジミー君も泣き止むはずだから」
「い、いやそんなあたしは…」
「いいから先生の言うこと聞きなさい」（キラッ）
「うぁぁぁぁ!!はっ…」（じょおおおお…）
あたしは服従電波のせいでおしっこを我慢出来ずに漏らしてしまった。あたしは何だかよくわからない…もう目の前が真っ白になってきた
「ホラ。見なさいジミー君。ブラッドベリーもおもらししてるわよ。だから泣かないの!」
「う、うん…ごめんなさい…ブラッドベリーちゃんありがとう…」
なんでお礼を言うんだろう？でもみんな優しいな…ローレライ先生はあたしとジミーを別の部屋に移動させ、着替えさせてもらった。
と言ってもあたしの学園制服は一着しかなかったから、乾くまではだかんぼだった…というより替えの下着だけはあったので
パンツ一丁ていう結果になった…
「ホラホラ。早く教室に戻らないと…」
「そ〜だよ　みんな待ってるんだよ。」
「そ、そんな〜無理だよ〜あたし…うぁぁ!!!」
また服従電波か…ローレライ先生は耳元でこう囁いた
「相手は少年なのよ…恥ずかしがらないの…そうしないと…」
「ねぇねぇ、先生何話してんの〜？」
「うぅん何でも無いよ。あ、そうだブラッドベリーがね…ジミー君がまたおもらししたら一緒にしてあげるって♪」
「え、そうなの？でも、ボク男の子なんだからしっかりしないとダメだよね…」
胸を張ろうとしたジミーに対して何を思ったのかあたしは…

「ねぇジミー君…あたしもおしっこ我慢出来ないから、そういう時はジミー君もおもらし出来ないかな？」
「う、うんありがと…ボクブラッドベリーちゃんの事大好き♪」
「あら～良かったわねもう２人はもうお友達ね♪」
何言ってんだあたし…そして教室に戻ろうとしたとき他の男の先生の目のやり場に困るということからあたしはジャージを着てみんなと
遊んだ。そしたらまたジミーが…
「先生～またおしっこしたくなっちゃった」
「あら大変。でも偉いわね自分で言えて、今度はちゃんとトイレに行こうね。あ、そうだブラッドベリーもおしっこしたいでしょ」
「う、うん」
「だったら一緒にトイレに行きましょうね。」
「うん。行こうブラッドベリー♪」
「うんわかったよ」
そしてあたしとジミーそしてローレライ先生はトイレに向かう。ジミーは男が使う小便器ってヤツで済ます。そしてあたしは男が大きい方
をする方の普通のトイレで済ますつもりだったけど…
「ねぇブラッドベリー。ボク達と違ってそっちでするの？」
「う、うん女の子はそうなんだ…」
「でも一緒におしっこしたいから…ねぇいいでしょ？」
まぁ確かにロマーナは現時点で男しかいない国だからトイレは基本的に男子用しかないもんな。ていうかあたしは無理って言おうと
したけどローレライがあたしに服従電波を見せつけた。そうなるとあたし、またおもらしを…それはやだな…トイレまで来たのに
そして仕方なくあたしはジャージを脱いでしゃがんで小便器に向かっておしっこをしようとする。だけど緊張して出ない…そしてジミーは
「ねぇブラッドベリーまだ出ないの？ボク先に出ちゃうよ～」
「ちょっと待ってよ～あたし…うぁっ!!!」（じょぉぉぉ）
「あ、出た。じゃボクも…」（ちぃぃぃぃ）
ローレライ先生が服従電波を軽目に放った事がきっかけであたしはおしっこが出た…あたしのおしっこは小便器に向かって勢いよく
出ている。そんな中ジミーはもうおしっこは済んでいた。まぁ、少年だから当然か…
「ブラッドベリーっていっぱいおしっこ出るんだね」
「まぁそりゃあたし皆よりおっきいから…」
「あ、ちょっと待ってブラッドベリー、おしっこしたらふきふきしないとダメよ」
ローレライ先生が普通のトイレから紙をとってきてあたしのアソコを拭いた。

「先生こんなのあたし一人で出来るからぁ…」
「ダ〜メ。立ったらトイレが汚れちゃうでしょ…」
「ご、ごめんなさい先生…」
「じゃ、戻りましょう２人共」
あたし達は教室に戻り学園の終業時間まで楽しく遊んだ。そして…あたし達の一日学園生活はついに終了したけど…ジミーが
「え〜ブラッドベリーもういなくなるの〜そんなのやだ〜」
「ジミーあたしはジャポネスに帰るんだ…ジャポネスにくればいつでも会えるぜ」
おっと、学園生活が終了したもんだから素が出ちまったな…
「ねぇ、ブラッドベリーってやっぱりあのブラッドベリーなんだね…」
「ん、どういう事だ？」
「ボクねずっとブラッドベリーに憧れていたんだ…強くてたくましくてボクもブラッドベリーみたいに強くなりたいんだ…でも…」
「でも？」
「テレビとかニュースとかでしか見たことないし、テラツーを救ったのにテラツーにいなくなったって聞いたらボク…なんだか…
強くなりたいとかどうでもよくなったんだ…でもブラッドベリーがテラツーに戻って来たなんてボクびっくりしちゃった。」
「そうなんだ…」
「だから…ボク…何だかあのマリオネットブラッドベリーに似てるなって思ってあの時トイレに行くのを忘れちゃっておもらししちゃった。
でも…ブラッドベリーもおもらししてくれたからもっとおしゃべり出来る様になってそれだけでも嬉しかったんだ」
「ジミー…ははッじゃあたしがこのテラツーに戻って来たんだからちゃんと強くなれるようにトレーニングは毎日するんだぜ!!」
「う、うん!!ありがとうボク…頑張るから!!!」
ジミーは強くなりたいと言う気持ちが伝わったせいかあたしはつい…ジミーのおでこにキスをした。
「えっ…どうしたのブラッドベリー…」
「これはあたしからの頑張れって意味さ…」
「よくわかんない…」
「ははッ少年にゃよくわかんないよな…」
「ブラッドベリー早くしないと置いていくわよ〜」
「あぁ分かった待ってくれよ〜」
「バイバ〜イ!ブラッドベリー!!!また遊びに来てね〜」
ジミーがあたし達に挨拶したと同時に他の少年達も挨拶をする。そしてあたし達はその学

園を離れていった。
あたしは凄い経験をしてるな…アダルトビデオの時はちょっと微妙だったけど今はローレライに改造されて良かったなって思っている…
でもおもらしの話は恥ずかしいからしないでおこう…おっと小樽達のお土産も忘れないとな♪…花公はどうでもいいか♪

ティーゲル編　序章　恩返しをしたい
あたしはティーゲル。あたしは間宮小樽達との戦いで乙女回路がほとんど故障してしまった。だけどあたしは復活したローレライが
あたしの乙女回路を修理してくれた。そして今あたし達セイバードールズは優しさを取り戻したファウスト様の命令でジャポネスで
社会勉強をすることになったんだ。
だがそんなある日、あたしはローレライに呼び出された。きっと、あたしも改造されるだろうな。なにしろルクスがおねしょをするように
なったのはローレライが改造したから…だけどあたしはどんな風に改造されようがあの人の言う事に反抗するわけにはいかない。
「あら、ティーゲル。待ってたわ」
「お久しぶりです　ローレライ」
「早速で悪いけど、あたしは研究のためにあなたを少し改造する事になったの。いいかしら？」
「勿論大丈夫です。お願いします!」
「よかった　では早速カプセルの中に入ってね」
「はい」
そしてカプセルに入ったあたしは眠りについた。そして目が覚めた時はどんな風に改造されたか気になり出しながら色々と体を触ってみた。
だけど…
「ローレライ　特に変わった様な事は…」
「その内わかるわ。今言えるのは食べ物や飲み物がおしっこや愛液に変換する機能を搭載させたの」
「そ、それじゃ　あたしもルクスみたいにおねしょを？」
「大丈夫よ。しないから。と言ってもあなたはルクスと違って乙女回路の性質が違うからおねしょ自体出来ないけど…」
「そうなんですか？では、あたしは基本的に何をすれば…」
「そうね。例えば保母さんになったり、メイドさんになったりとか…」
「それだけの事でいいんですか？喜んで受け入れます」
「ふふッありがとうティーゲル。それじゃ、やってもらいたい事が来たら呼び出すからお願いするわ」
「はい。失礼します」
そしてあたしは今住んでいる家に戻ってパンターにこれからの出来事を報告した。
「なんだよ。お前も改造されたのか。ということはあたしもいつか…」
「あたしはそれでいい　ローレライに恩返しをしたいんだ。あたしの乙女回路を直してくれたんだから」

「わーったよ　まぁルクスみたいに家から離れそうに無いからまぁ一安心だな」
「それが、いつかはわからないけどローレライと一緒に西安やペテルブルグに出張する事になったんだ」
「え、じゃあ「ファウスト・ダィナース」はどうなるんだ。あたしとルクスだけで切り盛りしろってことか？」
「ローレライが代わりのマリオネットを用意するから大丈夫だと」
「あ〜そうかい。でもあんま無理しちゃ駄目だぜ」
「あぁわかった」
そしてあたしはローレライの呼び出しが来るまではいつもの通りに仕事をこなしていた。
だけどあたしは全く知らない。これから
どんな展開になるかを…でもあたしはローレライのために挫けるわけにはいかないんだ。

ティーゲル編　第一章　淫乱なご主人様にご奉仕
あたしはついにローレライの研究の手伝いが始まった。ただし今回のあたしの出張先はロマーナの富豪がジャポネスに別荘を構えた所だ。
「あ、来たわ。ティーゲル挨拶するわよ…あの方はロマーナの富豪のガルティン氏よ」
富豪と言っても少し若く、そして華奢な体型をしていた。ちなみに顔も若い頃のファウスト様に似ている気がする。
「はじめまして。あたしはティーゲルと申します」
「お初にお目にかかります…ですが確かあなたはガルトラントのセイバードールズでは…」
そこを突かれては…なんて言えばいいか…と迷った時ローレライは
「ガルティン氏…彼女はもう昔の彼女ではありません。今ではテラツーのために社会勉強をしている身ですので、全く危害はありません。」
「ローレライ氏がおっしゃるなら信じましょう。」
あたしはローレライに小声で
「ありがとうございます…あたしのために」
「気にしなくていいのよ…」
そしてあたしは支給された衣装に着替え、ガルティン氏いやご主人様の指示に従い、まずは大広間の掃除から始めた。他のマリオネットも
あたしと同じ仕事をしている。だけどあたしは慣れてないためかご主人様が…
「ティーゲルさん。そこはもう済んだ場所ですよ…」
「あ、申し訳ございません」
「まったく、行動力があっていいものですが無理は良くないですね」
「は、はい」
「ローレライ氏を見なさい冷静に対処してるではありませんか…」
実はローレライも使用人として働いている。と言ってもあたしを監視するために働いていると言うべきだろうな…
そして料理をする時間が始まった。ただしあたしは初日だから食事を配膳する係だったがご主人様は
「う～んたまには乙女回路を持ったマリオネットの食事をいただきたいものですな…」
「そ、そんなあたしには…」
「なぁに、私は心のこもった食事をいただきたいと言っているんですよ…」
「ティーゲル。あたしも手伝えるだけの事はするからここは言うことを聞きましょう」
「はい…ではご主人様どのようなお食事がよろしいのでしょうか？」
「そうですね。ウェルダンのステーキが食べたいですね。君…作り方を書いてくれ」
「了解しました…」（サラサラ）
そして 3 分後…ウェルダンのステーキの作り方を書いたメモを使用人マリオネットに貰った。そしてあたしはそれを読む。

「なるほど…」
「出来るの？」
「何とかなりそうです…それにご主人様は心を持ったマリオネットの食事をいただきたいと言っていますから…」
そしてあたしは厨房でメモに書かれた作り方の通りに作った。あたしは「ファウスト・ダィナース」でよく料理をしているので少しは
自信がある。ちなみに野菜を甘く煮詰めたグラッセも添えた。それはメモには書いていないものだ。ローレライのアドバイスでも無い。
つまりあたしが勝手に作ったものだ…
「ご主人様。お待たせ致しました」
「ほう。うまそうですね…ところでグラッセが入っていますが…これは…」
「あたしがステーキの他に何か飾りを付けた方がと思い…」
「なるほど…さすが心を持ったマリオネットだ…さていただくとするか…」
ご主人様は早速ステーキにナイフを入れ、フォークで刺し口に運ぶ…だけど…
「少しミディアムではないですか…中まで焼けてはいませんね」
「も、申し訳ありません…」
「ですが味付けは合格です。生臭い所を除けばの話ですが…」
「あ、ありがとうございます!」
「良かったわね。ガルティン氏…もうひとつ言っておきますがティーゲルはあたしのアドバイスはほとんど聞かずに自分一人で作ったの
です」
「さすがですね…私の予想以上だ…素晴らしい…」
「そ、そんな…あたしは…」
「謙遜しなくてもよろしいのですよ…ティーゲルさん…夜…私の寝室に来てください。」
「一体何を？」
「それは来てからのお楽しみです…」
そして夜あたしはご主人様の言われた通りにご主人様の寝室に向かった。だけど…
「ご主人様。失礼します…はっご主人様その姿は」
「ふふっ見ての通りですよ。あなたには本日最後のご奉仕をしてもらいたいのです。そう…口でね…」
ご主人様の体は全裸だった。口でということはあたしはご主人様の「もの」を舐めろと…
「嫌ですか…それでもいいのですがね…実は…」（すっ）
「それは…」
見たことがある…それはあたしがローレライに逆らえば強力なプラズマを放つ「服従電波」だ…だがあたしはそんなものを使わなくても
あたしの乙女回路を直してくれたローレライのためを思えばどんな汚らわしい事でも受け

入れる。
「では…やらせていただきます…」
「お待ちなさい…まだ私を興奮させてはいないではないですか…」
「は、申し訳ありません」
「焦らずに…ゆっくりと服を脱いでください。」
「はい。わかりました…」
あたしはゆっくりと服を脱ぎ、下着姿になる…それを見てご主人様の「もの」は次第に大きくなっていく…
「おぉさすが豊満な肉体だ…それに心を持ったマリオネットだから恥じらいもある…これは興奮するな…」
「そんな…」
「よろしいですよ…私のここはもう絶頂期ですから…」
「はい…失礼します」（カポッ）
ピチャ…ピチャ…とご主人様の「もの」を舐め始める。だけど…
「うぅ…やめろ!!!こんなに粗いものとは思わなかった…」
「はぁっ!申し訳ございません!」
「ふん…まぁいいですよ…そういう時は練習すれば何とでもなるはずです…」
「と申しますと…」
「明日、私はある物を用意しますので…　今日はもう休みなさい」
「はい…」
あたしはご主人様を怒らせてしまい、指定された部屋で眠りにつくもあたしはあまり眠れなかった…
そして翌朝…あたしは何をされるかも知らずご主人様に一般的なご奉仕をした。そして昼になるとご主人様はあたしを中庭に呼び出した。
「ティーゲルさん…服を脱いでください」
「はい…」
あたしはご主人様の命令通りに裸になったまさか…こんな所で…と思ったらご主人様は「あなたのナニをあたしの口に」と書かれた
ひも付きの看板をあたしの首に下げた…
「ご主人様…これは一体…」
「昨日言った通りフェラチオの練習をしてもらいますよ。」
「ですが…この看板は一体なんなんですか？」
「地球では「ダッチワイフ」と呼ばれる人形があると聞いたことがあります。それをもとにあなたはダッチワイフになりきってもらい…
色々な男性にご奉仕をするのです」
「わかりました…」

「さすが…聞き分けが良くて大助かりですよ…あ、そろそろ来ましたね…」
中庭にやってきたのは金持ちの雰囲気を醸し出している男たちだ…それもぞろぞろと…まさか…
「ティーゲルさん。口をこの様に…」
ご主人様は、歯を見せず口を尖らせた。あたしはそれのマネをした。
「いいですね。テラツー史上初の「南極一号」と言うべきですね…あぁ「南極一号」とは地球ではそう呼ばれていたダッチワイフの事です」
「そうなのですか…」
「そして今回あなたがご奉仕するのはジャポネス滞在のお偉いさん達ですよ。ざっと 20 人近くいます」
「わかりました…」
そしてあたしは一人づつ男にご奉仕をすることとなった。あたしはその「もの」を舐める…だけど…
「バカヤロウ!!そんなんでこのワシを喜ばせようってか!?」（ドカッ）
あたしに蹴りを入れて帰る奴もいれば、「良かったぞ」と賞賛する奴もいる。そして最後の男には…
「最後で良かったぜ…あんたどうやら…奉仕を繰り返す内にどんどん上達していくタイプだな」
あたしは褒められた気はしなかったが、ご主人様は…
「もうお分かりですね…何故私がこのような催しをしたのか…」
「はい、全てはご主人様のため…」
「そう、ではこの看板を外して私に…」
「はい…ご主人様…」
「待ってください。私と二人きりの時はガルティンと呼び捨てでよろしいのですよ」
「何故です!?」
「あなたがどんなに頑張っても私とは主人と部下との関係にはなれません…何故ならばあなたには、本当のご主人様がいるではないですか」
「ですが!?」
「お願いですティーゲル…私のワガママを聞いて下さい。私は主人と部下の間柄を超えた関係を経験してみたいのです…」
ご主人様があたしの事を呼び捨てに…あたしはそのガルティンのワガママに答え…
「わかった、いえわかりましたガルティン…その願い叶えましょう」（カポッ）
「おおぅ!!凄い。なんとここまで成長していたなんて…さすがですねティーゲル」
「はりふぁふぉう、ふぉはいまひゅ…」（レロッ）
お互い呼び捨てだが、何故かお互い敬語で話していたという微妙な感覚を抑えながらガルティンはとうとう

「おぉう。で、出ます。顔に出したいんです…離れて…下さい」
「はひ…ぷはっ」
「あぁッ…」（ドピュッ）
ガルティンの精液は顔に出された。今までは飲み込んでいたためあたしとしては驚きは隠せなかった。
「ありがとうございます。これで満足です。ティーゲル…これであなたのここでの仕事は終了です」
「こちらこそ…様々な経験をさせてもらって光栄です」
そして、別れの時が来た。ガルティンは明日か明後日位にロマーナに帰るらしい。
「そうだ。ティーゲル。あなたの店に寄ってもよろしいでしょうか？あなたが作る料理を沢山食べたいのです」
「もちろんです。ご主人様が…」
「おっと、もうガルティンと呼び捨てで結構ですよ。あなたはここのメイドではないでしょう…」
「はい…あたし待っていますから…うんと美味しい料理を作りますから。」
「ははは…」
そしてあたしとローレライは玉三郎が運転する車に乗りガルティンの別荘を後にした。そしてあたしはローレライに
「ローレライ。あたしはこれからもあなたのために…ん…そうか!」
「どうしたの？ティーゲル」
「いえ、何でもありません…」
「そぅ…」
そういえばあたし…ローレライの事を呼び捨てなのに敬語を使っているな。呼び捨てなのに敬語なんてよく考えたらちっともおかしくない
じゃないか!あたしはそんなばかばかしい事に気づいて、帰宅することとなった。次はどんな展開になるのだろうか。もっといい経験が
出来ればいいな。

ティーゲル編　第二章　四聖獣で彩られた体
今回はあたしとローレライは本格的な出張をすることとなった。場所は西安。目的地まで機関車で行く事となった。
「着いたわよ。ティーゲル。」
「もう着いたのですか？」
「えぇここが今回の出張の場所よ。」
中に入ると壺やら皿やらあると言うことは、もしかして芸術品作りでもチャレンジするというのか？
「あ、来たわよ。挨拶して」
「は、初めましてあたしはティーゲルと申します」
「初めまして。ワタシは絵師・陶芸家の蒼植（そうしょく）でアル」
「では先生、今回ティーゲルにはどのような事をするか教えて下さい」
「そうアルね…う～ん…」
蒼植先生はあたしをじっと見つめている…おそらく雰囲気を感じ取っているのだろうな…
「よし!ティーゲルさん。アナタ…脱いで欲しいアルね…出来るか？」
「何故です？」
「アナタの体に、美しい絵を描きたいアルよ…そう…ワタシは「ボディペイント」をしたいアル…」
「分かりました。たやすい事です…」
「おぉ、よく言ったアルよ」
そしてあたしは全裸になり先生は画材の準備をする…ローレライは陶芸を体験したいらしい。服従電波はどうやら先生に渡した様だ…
「おぉ、なんていい体してるアルか。描く気持ちが高まってくるね♪」
「は、はぁ。ところであたしの体にどのような絵を描くのですか？」
「四聖獣アル。」
「四聖獣？」
「西安、いやこの西安の元である地球の国中国では東方の青龍、南方の朱雀、西方の白虎、そして北方の玄武がいたという伝説がアルね」
「それを描いて行くのですか？というより体のどこに？」
「それは描いたらすぐにわかるアルよ。心の準備はいいアルか？」
「はい…」
「よろしい。では早速…」
先生はまずあたしの鎖骨部分に筆を入れる。だけど何故か軽いプラズマの様な痺れが来る。
「あぁ言い忘れてたアルけど、この筆はなぞっただけで軽いプラズマが走る特別製の筆アルね」
「何故そんな事を？」

「普通の人間なら、くすぐったくて感じるアルけどマリオネットは普通の筆で塗ってもあまり感じないアル。それではつまらないアルね」
「そんな…」
「文句アルのか？さもないと…」（すっ）
「い、いいえ何もありません。お願いします…」
「ローレライさんの言うとおりこの服従電波が必要ない位、従順アルね…まぁいい続けるアルよ」
そして鎖骨部分の北方の玄武の絵は終了した。あたしから見てどんな形をしているかはよくわからない。だけど軽いプラズマで少しずつ
感じているあたしは右胸に西方の白虎を描かれたところから、急に尿意を催した。
「あ、あの先生、あたしトイレに…」
「マリオネットのクセに小水が出るなんて信じられないアルよ…次は青龍行くね」
さすがに漏らさないと信じてくれない様だな…そして左胸には東方の青龍を描いた。という事はアソコの部分は…
「それじゃ最後朱雀行くね…ん、どした顔色悪いアルよ…言っとくが小水は信じないアルからな…」
「そんな…」
そして朱雀を描きはじめた先生は少しテレ気味になっている。
「マリオネットってこんなアソコしてたアルか？」
「あたしに言われましても」
「…そういうことアルか…だけど小水は我慢して欲しいアルね　その方が興奮出来るアルからな」
「そんな…それでは床が汚れて…」
「いいから黙るアルよ…」
「はい…」
そして朱雀の絵が描き終わると同時にあたしは…ついに…
「あはぁ…」（ぷしゃあああ）
漏らした…ルクスみたいにおしっこを漏らしてしまった。そして肝心の先生は
「よくここまで我慢したアルね…なかなかよかたアル…」
「怒らないのですか…」
「あぁ、んじゃこの絵はまだ完全に乾いてないから、乾くまで待つアルね…」
「はい…」
そして乾くまで横になり、先生がいいと言ってから立ち上がった。そして…それを鏡で見た時は…
「こ、これは…」
「凄いアルよ、全身に力がみなぎって来ないアルか？」

「確かにこれを見ていると、不思議と力が湧いてくるような」
「うむ、そこが四聖獣の凄いとこアルね。まぁ後はその絵を落とすなりそのままにしておくなり好きにするアルよ。これでワタシの仕事は
終了アル。」
「ありがとうございます。先生」
そしてあたしは色彩がべたつかない位になってから服を羽織り、ルクス達にお土産を買って西安を後にした。
そしてあたし達はジャポネスに戻り、ルクスとパンターにあたしの四聖獣で彩られた体を見せた。
「どうだ？この絵は」
「すげぇ…かっこいいじゃねぇかよ。それにその白い虎一番かっこいいな。」
「あたしはその赤い鳥が…ん。ちょっと臭うわね…もしかしてティーゲル…」
あたしは照れながら正直に…
「あぁ、描いてもらっている最中漏らした…ルクスは鼻が効くな…」
「ふふ、あたしと同じね。あたしはおねしょしかしないから、漏らす状況は違うけど…なんか嬉しい♪」
「はぁ…お前ら本当にシモ緩いんだな…」
「パンター。お前もそのうちそんな風に改造されるぞ…」
「へっ、あたしは改造されたとしてもシモが緩い様に改造されるわけがねぇからな♪」
「そういう事言うと折角のお土産はルクスだけしかあげないぞ…」
「わぁ肉まんだぁ♪残念ね。パンター。この肉まん美味しそうなのにね〜」
「わ〜!!ごめんごめん。許してくれよぉ」
パンターはよだれを垂らしながら謝った。そしてあたしたちは肉まんを温めてからおいしくいただいた。
「ん〜美味しいわねぇ♪」
「うめぇうめぇ!」
「こらこらパンター。西安名物のお茶もあるんだ。もっと味わっていただくんだ。」
「お、おうごめんよ…」
そしてあたしは出張の大変さだけでなく楽しさも経験出来た。だが次はおそらくペテルブルグへ出張だ…西安の時の様な楽しいものでは
ないはずだな…何事も無ければいいけど。